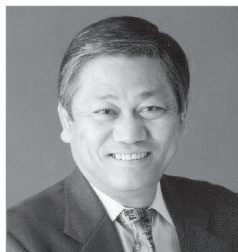


巻頭言

繰り返してはいけない歴史
—極右勢力の台頭—

ミッション・宣教の声 主幹 黒田 禎一郎

「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」マタイ26・52

EU(欧州連合)先導国であるドイツは、かつてアドルフ・ヒットラー率いるナチスによりユダヤ人大量虐殺という重大な過ちを犯しました。第二次大戦後、ドイツのキリスト教会とクリスチャンは深い悔い改めを行い、歴史の過ちを決して繰り返してはならないと宣言しました。しかし、最近再びネオナチ勢力が急台頭してきました。

今年6月2日、ヴァルター・リュブケ氏(65歳)は、カッセル区長ヴォルフスハーゲン市の自宅テラスで頭部を銃で撃たれて殺害されました。ヘッセン州警察特捜本部は、カッセル市在住の45歳のドイツ人(A)を殺人の疑いで逮捕しました。リュブケ氏はシリア難民支援に前向きだったヘッセン州の地方自治体の責任者でした。彼が自宅で殺害された事件は、ネオナチと関係が深いことが判明し、ドイツ社会に強い衝撃を与えています。

■悪質な政治テロ

カールスルーエの連邦検察庁は、「ドイツの民主主義体制を揺るがす悪質な政治テロの可能性があると発表し、6月16日以降この事件を担当することを発表しました。連邦検察庁が捜査を引き継ぐということは、事件の重大性を示します。ドイツでは通常殺人、強盗などの暴力事件は地方検察庁が担当します。ただし極右・極左によるテロなど、政治的な背景を持ち、憲法と議会制民主主義に基づく国家の枠組みに影響を与える犯罪については、連邦検察庁が捜査します。

容疑者Aは、1980年代から極右組織のメンバーと接点を持ち、筋金入りのネオナチです。彼は20代の頃から外国人を標的とする犯罪を繰り返し、その名前は過激勢力を監視する連邦憲法擁護庁のデータベースに登録されていました。彼は数々の事件を起こし実刑判決を受けていました。そして極右政党・ドイツ国家民主党(NPD)に加盟し、ヘッセン州の極右団体「コンバット18」とも接点がありました。ただし、2009年以降目立った活動をしていなかったため、憲法擁護庁は彼に注目していませんでした。同庁は「ドイツには暴力的なネオナチが約1万3000人もいるため、全員を24時間監視することは不可能だ」と説明しています。

捜査当局は、Aが2009年以降もインターネットを通じてほかの極右勢力との結びつきを強め、思想を過激化させていったものと見ています。

■事件の背景にあるもの

このようなリュブケ氏暗殺事件の背景には、2015年の難民危機問題があります。彼はキリスト教民主同盟(CDU)党员で、1999年から10年間にわたりヘッセン州議会議員でした。2015年にメルケル首相がシリア難民の受け入れを決めたとき、彼はキリスト教徒の相互扶助の精神に基づき、難民受け入れを支持しました。同年10月、ヘッセン州の難民居住施設で開かれた住民集会で、難民支援について理解を求めましたが、会場にいた右翼グループ・カギーダ(欧州のイスラム化に反対する右翼団体)から罵倒されました。

これ以降、リュブケ氏はネオナチの激しい攻撃に曝されるようになったと言われます。リュブケ氏を誹謗中傷するメールは300通以上送り付けられ、なかには殺害予告メールもありました。今では多くの自治体関係者にとって、極右のヘイトスピーチや脅迫に曝されるのは日常茶飯事となっています。2011年、旧東独のネオナチ集団NSU(国家社会主義地下運動)が、2000年からの7年間に外国人9人、ドイツ人警察官1人を射殺したり、爆弾テロや強盗を繰り返した事件が起っていました。極右勢力の暴力犯罪のエスカレート背景には、右翼政党の躍進やネット上での難民、イスラム教徒、ユダヤ人に対するヘイトスピーチ等の拡散により、社会の粗暴化が進みつつある事実があります。

■欧州は今

5月に行われた欧州議会選挙では、EUの政策に批判的な極右やポピュリズム(大衆迎合主義)が、全体751議席の3割の議席を獲得しました。フランスやイタリアでは、すでに懐疑派が第1党となりました。またフィンランドでは右派が台頭し、総選挙で第2党に躍進しました。今、ヨーロッパは激しく揺さぶられています。いつもスケープゴートとされるユダヤ人迫害は終わっていません。どうぞ、欧州とユダヤ人のためにお祈りください。

Networking Jewish Evangelism
LCJE

P2▶4
ディクーン・ジャパンパートナーシップ

P5
シオンとの架け橋 石井田 直二

P6
エンドタイム・ミニストリー 石田 吉男

P7
アルコイリス・ミニストリー 早川 衛

P8
7Pの続き
お知らせ 事務局より

シモン・アミット氏の本誌連載原稿に対する応答2



ティックーン・ジャパンパートナーシップ代表世話人

ホープチャペル 主任牧師 スティーブン・ケイラー 日之出キリスト教会 牧師 行澤 一人

.....
本論文は Ariel Blumenthal が執筆し、Dan Juster、Asher Intrater、Eitan Shishkoff、Ron Cantor、Guy Cohen そして Gil Afriat がこれを承認した。翻訳は、行澤一人が担当した。

「Tikkun の回復主義神学に基づく声明」(2)

2018 年 8 月

序章

第 1 章 イスラエルの物理的・霊的回復

..... (以上、前号)

第 2 章 教会の回復

教会の回復というテーマに対する Tikkun の見方は、福音主義的プロテスタント、そしてペンテコステ／カリスマ的キリスト教に属する様々な歴史的運動圏にあるイエシュアの弟子たちと多くの点で共通しています。すなわち、初期の数世紀の後、教会は長い停滞と政治化そして低俗化の季節へと入っていきました。もちろん、その中でも希望の光はいつもあったのですが、私たちが信じるところによれば、新約教会の偉大な回復のプロセスは、「宗教改革」と聖書の権威へと立ち返りとして始まったのです。この教会の回復のプロセスも、イスラエルの回復の場合と同様、完全なものではなく、究極的には主が再臨され、死者がよみがえり、主と共に治める千年王国の統治が始まるまでに全うされるものでないと私たちは信じています。それでも、私たちは、次に示す二つの聖書的な領域において、信仰と、聖霊と共なる働きにより、主がお許しになる限りの満たしと回復を追い求めて戦うものであると信じているのです。

A. メシアのからだ／教会にある一致

ヨハネ 17 章に記されたイエシュアによる「大祭司の祈り」において、主は何度もそこにいた弟子たち、そして彼らの言葉によって信じることになる私たちすべてのために一致を祈られました(11, 20 節)。主はこの一致を、キリストにある父の栄光が私たちにも現わされることと、父がイエシュアを「遣わされた」ことを世が知るに至ることの二つの効果に結び付けて祈られたのです(21-23 節)。イエシュアのこの最も中心的な祈りによれば、私たちの一致は、みからだなる教会において父の栄光を見ること、そして世界宣教達成のための鍵であることが分かります。この祈りは、おそらく父の御座の前にある、イエシュアと聖霊によるみからだなる教会のためのとりなしにおいて、過去 2000 年間ずっと、そしてなお今も中心的なテーマなのです(ヘブル 7:25、ローマ 8:26-27)。

私たちが強く信じていることは、このイエシュアと聖霊による祈りは、主の再臨前に、**相当のレベルにおいて**答えられるはずだ、ということです。それは、もしこのような一致が主の再臨時にしか実現されないものだとしたら、イエシュアはヨハネ 17 章において何のために執り成しの祈りを捧げたのか、またローマ 8 章において聖霊は何のために執り成しの働きをするのか、意味をなさなくなるからです。もし、すべてが主の再臨時にのみ回復すべきものであり、**そこに至る直前まで**微塵も前進しないのだとすれば、主が、あるいは私たちが執り成しの祈りを捧げることに何の意味があるでしょう。「御国をきたらせたまえ、御心の天になるごとく、地にもなさせたまえ」という「主の祈り」は、再臨を求めるためだけの祈りなののでしょうか。そうではなく、「今、ここに」御国を求める祈りなのではないのでしょうか。

Tikkun は、キリストのからだの一致を信じ、またそのために献身しています。この一致は、聖書信仰と言い得るための基礎的要件にもとづいて妥協なく建て上げられなければなりません。もちろん、現状は、多くの伝統的な教会のみならず、22000 以上あると言われるプロテスタント諸派も、みな聖書を自らの権威であると主張しています。私たちを批判する方々の中には、私たちとの対話を誤解して、<私たちは、すべての教会が一つの組織もしくは統治の下に来なければ、この一致は実現されないと信じている>と当て推量する方がおられますが、もちろん、私たちはそんなことは信じておりません。

..... (中略)

B. エペソ 4:11-13 に従った、みからだなる教会の新約的リーダーシップの回復

ほぼ 40 年にわたって、Tikkun はエペソ書 4:11 に認められる教会のリーダーシップについての「5 役者」モデルを理解し、これを適用しようと努めてきました。私たちはこの点において、世界中で増え続けるペンテコステ・カリスマの諸教会・教派・運動と同じであります。「5 役者の回復」は、世界的な視野で教会を見ると、最も急速に成長している領域の一つであります。同時に最近の論争のほとんどがこの点に集中しているため、以下では十分な紙幅を割いて私たちの理解についてご説明申し上げようと思います。

私たちに対する主要な議論／批判は二つであるように思います。第一は、使徒や預言者はもはや存在しないという原理を信奉される方々からのものであり、第二は、使徒や預言者が継続して存在し得ることに理解を示しながら、私たちが何か使徒や預言者の表現において恣意的もしくは不適切に行動していると感じる方々からのものです。

【使徒や預言者はもはや存在しないという見解について】

Tikkun は、次のような要素を典型的に含む、いわゆる古典的ディスペンセーション主義による「終止神学」パッケージには同意しません。すなわち、A) 2 世紀もしくは 3 世紀に新約聖書の正典化がなされてからは聖霊の力の賜物は「終止した」。B) 同様に使徒や預言者の存在や機能も「終止した」。C) 大難難前の携挙の原理。

……………(中略)……………

どんな聖書のテキストを解釈する場合でも、もっとも重要な作業は当該テキストの直近のテキストに当たってみる事です。他のテキストあるいは他の作者から意味を拝借する前に、私たちはまずパウロのことばを通じて聖霊が何を意図されたかを知りたいのであり、それはこの場合エペソ 4 章 11 節における使徒や預言者には継続的なリアリティがあるのか(あるいはないのか)についてです。

11 こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、13 ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。エペソ 4:11-13

(新改訳聖書第 3 版) (下線筆者) *

どうでしょう。13 節において「ついに」(英語訳では、until) という言葉こそがこの議論を終わらせることになるのではないのでしょうか。これは字義通りの意味であり、これを理解するために神学修士号や博士号は必要ありません。イエシュアが昇天され、聖霊を注がれたとき、そこには教会のリーダーシップの基礎としての 5 役者の賜物も含まれていました。その目的はすべての聖徒たちを奉仕の働きのために整え、訓練し、メシアのみからだを「建て上げる」ためです。そしてこの 5 役者はいつまで必要とされるのでしょうか。キリストのからだを「建て上げる」ことの目的は何でしょうか。

ここでパウロが語っていることは、とても挑戦的なことです。彼は、これらのすべてのことは、私たちが「信仰の一致」と「神の御子に関する知識の一致」、そして「完全なおとな」に達するまで続くべきものと記しているからです。それは、どれほどの一致でしょう。そしてどれほどの知識? どれほどのおとな? その程度は? そしてそれを図る基準は? そうです、それはキリストの満ち満ちた身たけ(ギ)プレローマ)と同じレベルだということです。

ここで使われている「満ち満ちた」という言葉は、コロサイ 1:19 や同 2:9 において、イエシュアのうちに宿らせられた「満ち満ちた神の本質」というときと同じ言葉です。では、父なる神の満ち満ちた本質は、どれくらいイエシュ

アに宿っていたのでしょうか。もちろん、100%です(私たちはイエシュアの神であられるご性質を完全に承認します)。つまりパウロは、ここで、キリストのみからだは、一致と神の御子に関する知識の程度において 100%に達するようになるときが来るということを教えようとしている(より本質的には預言している)のです。それは、キリストが完全であるように教会も完全になり、御子において御父が満ち満ちているように、教会のうちにも御父が満ち満ちる、そういうときが来るということです。

文脈上、聖書のこの箇所の論理の流れ(1-7 節における有名な「一致の宣言」から始まる)を追えば明らかですが、神の言葉は、5 役者の賜物の存在と働きは、この備え、建て上げ、一致、成熟が満ち満ちるようになるのを見るための中心にあることを教えています。5 役者のうちの二つ(使徒と預言者。以下、同じ)は何となく消えていき、もはや私たちが約束された満たしに向かうために必要でなくなる、あるいはその二つの務めは新約諸文書が正典化されると重要でなくなるということを示唆する箇所は、聖書中どこにもありません。

……………(中略)……………

【使徒や預言者は今日も存在し得るがその適用を疑問視する見解について】

ここで私たちは現代における 5 役者についての私たちの見解と実践について説明したいと思います。初めに二つのことを指摘しなければなりません。第一は、過去 6 か月以上にわたるイスラエルのメシアニック・リーダーたちとのメールのやり取りや議論において、Tikkun に対してもっとも批判的である方々は、同じように使徒や預言者の回復を信じている、他の様々な運動や組織と私たちが何年にもわたって関係している「はずだ」という想定に焦点を当てています。回復といっても、どんなことでも完全ということはありません。罪とプライドがはびこる世の常として、とりわけグーグルやユーチューブの時代に、探そうと思えば、どこかに「異端的」と思えるような行き過ぎを見つけるとは難しいことではありません。それでも強調したいことは、私たちが使徒や預言者その他 5 役者の完全な働きの回復を信じているからと言って、それは回復主義者である他の方々の教えや実践のすべてを受け入れているのではないということです。現代における使徒を信じていると、ある著者やリーダーが言ったからといって、私たちが、その機能の仕方についてまで同じ理解をしているということではないのです。

……………(中略)……………

私たちの願いは、イスラエルにおける他のリーダーの方々との継続的な対話において、Tikkun に対する、この「関連性があるから有罪」という論法を取らないでいただきたいということです。もし私たちが信じて、実践していることを知りたいのであれば、私たちが出版した本でも雑誌でもお読みいただければよいのであり、そのうえで、直接、

私たちにご質問いただければありがたく存じます(同時に、私たち自身も決して一枚岩というわけではなく、Tikkun のリーダーの中でも意見の分布があることがお分かりになるでしょう)。そのほうが、イスラエルにおけるみからだの健全な一致のためにはよほど有益だろうと思います。今や、私たちについて他の方々が語っておられることや、あるいはインターネットや種々の文脈のあちこちから引っ張ってきた引用のつぎはぎを加工して、Tikkun の世界征服の陰謀を「暴露する」というような珍妙なうわさがまことしやかに語られているようです! (訳者注: このような陰謀論は、かつてナチが利用した「シオンの長老の議定書」なる偽書と同じ程度において人種差別的悪意と虚偽に満ちたものであり、言い逃れ様のない反ユダヤ主義的言辞であると私は考える)。

第二に、私たちは、関係が持つ力を強く信じています。私たちはこの「関係性」こそ神のご性質の一部であると信じています。たとえば、ある Tikkun のリーダーが、完全ではなく(完全な者などいるのか?)、おそらくバランスと矯正を必要とするような会議やグループに参加しようと決断する時、どうやってそこに矯正をもたらすことができるでしょう。彼らのことをインターネットで全世界に晒して、批判するのでしょうか。そうではなく、愛と忍耐、そして相互の信頼関係を構築することによって、私たちは彼らに影響を及ぼすことができるのです。Tikkun のリーダーがいくつかのグループとの関係においてこのような方法で成功した例は、近年においても複数認められます。

以下では、私たちが使徒と預言者及び5役者の継続的な機能について「何を信じ、何を信じていないのか」、についてご説明していきましょう。

A. 私たちが使徒と預言者について信じて「いない」こと

1. わたしたちはイエシュアの 12 使徒(あるいはパウロを含めて 13 人?) と同じレベルの権威を持つ使徒が再び現れるということを信じていません。同時代におけるモーセのように、イエシュアの使徒たちは、新しい契約についての神の言葉を受け、これを聖書に記録する責任が与えられていました。彼らは、「子羊の使徒」と呼ばれ、その名前が新しいエルサレムの土台石に永遠に刻まれているのです(黙示 21:14)。またモーセのように、ある決定的な時点において、この使徒たちの教えと戒めへの不従順は即座に死をもたらすほどでありました(民数記 15 章、使徒 5 章)。この理由から、私たちが彼らのこと(パウロも含む。なぜなら、新約聖書のほぼ 3 分の 1 の著者としてその役割は比類なきものであるから)を記すとき、それは大文字の A から始まる「使徒」(Apostles)を用います。それ以降においては、小文字の a から始まる「使徒」(apostles)しか存在しません。

2. 私たちは5役者の使徒モデルを「王侯的」なもの(royal)として捉えることを断固拒否します。私たちは、古い格言の通り、「絶対的な力は絶対に腐敗する」と信じています。私たちは、どのような言葉を使おうと、リーダーシップについて、ピラミッド型の位階構造を認めません。たとえ、「父」「牧師」「長老」「使徒」「司教」「ディレクター」「CEO」など、どのような呼称を用いようと、誰かがリーダーシップにおけるピラミッド構造の頂点に座り、他のリーダーたちに対して相互に仕えあうような関係に立たないのであれば、彼はエペソ 4 章や他の多くの聖書のメッセージを完全に見失っているのです。

神の御国のすべての働きと権威に関する核心と基礎は、イエシュアの次のみことばに認められます。

「しかし、あなたがたは^{ラビ}先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。あなたがたは地上のだれかを、われらの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただひとり、すなわち天にいます父だけだからです。また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただひとり、キリストだからです。あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。」

(マタイ 23:8-11)【新改訳第三版】

メシアのからだにあっては、位階秩序はなく、機能があるだけであり、働きや働き人があるだけです。私たちは何よりも一人の父を持つ兄弟姉妹であり、また同じ王に仕える同労者、謙遜な奉仕者であるのです。

3. 私たちは Tikkun の使徒や預言者(あるいは牧師、教師、伝道者)が、私たちの働きの家族の外側にいる誰かに対して何らかの権威を有しているとは信じません! 他の働きと同様に、使徒や預言者も、その権威を受け入れる人々、また彼らを認める他の使徒や預言者に対してのみそうなのです。それは牧師も同じことです。牧師は、自ら牧会する会衆に対してのみ一定の権威を持つのであり、他の牧師の牧会する会衆に対してはそうではないのと同様です。もちろん、牧師も、お互いに責任を負いあう牧師のサポートグループの一部になることはできるし、そこで自らの町や地域や国のためにより大きなビジョンで祈り合い、協力する関係を深めることはできるでしょう。(つづく)

* 11 And He gave some as apostles, and some as prophets, and some as evangelists, and some as pastors and teachers,¹² for the equipping of the saints for the work of service, to the building up of the body of Christ;¹³ until we all attain to the unity of the faith, and of the knowledge of the Son of God, to a mature man, to the measure of the stature which belongs to the fulness of Christ. (Eph 4:11-13, NASB [New American Standard Bible])



イスラエルの重要性を学ぶ(2) 人間創造の多様性

シオンとの架け橋 石井田 直二

聖書研究会で行われた12回シリーズの学び「イスラエルの重要性を学ぶ」から、LCJE機関誌向けにリライトしてご紹介しています。今回の聖書箇所は創世記15:1～2です。

物事には世代交代の必要なものと、世代交代が不能、もしくは不要なものがあります。お茶やお花の家元は世代交代が必要ですが、普通の芸能人や芸術家は一代限りで、後継者は必ずしも必要ありません。

では、信仰はどうでしょうか。親子でも信仰は違いますし、多くの人々は信仰が「一代限り」と考えているようです。では、教会、そしてLCJEのような超教派団体はどうでしょうか。創世記15章の神とアブラハムの問答から学んでみましょう。

■次世代を重視したアブラハム

アブラハムは、創世記15:1で神から直々に「あなたの受ける報いは、はなはだ大きい」と言われています。もし、そういう言葉を神からいただいたら、あなたは何と言われるでしょうか。「ハレルヤ!主よ感謝します!」と喜ばないでしょうか。でも、アブラハムは「子がないのに…何をくださろうとするのですか」と不服を言い、少しも喜んでいないようです。

彼は、すでに創世記12章の契約で、全世界に対する神のご計画を知らされていました。ですから、自分の受ける祝福よりも、後継者が大きな問題だと考えていたのです。諸国民に祝福を与えるというミッションは、世代を超えた大きなもので、これから先、何千年の時を経て成就して行くものだと、彼は理解していました。

メシアニック運動にとっても、世代を超えた継承は重要課題です。「イエスを信じるユダヤ人」という存在は、神の忠実性の証であり、初代の死と共に消えてもよいわけではありません。19世紀末から20世紀初頭に、数十万人のユダヤ人がイエス・キリストを信じたのですが、今、彼らの子孫は、ほとんど見つけることができません。彼らの多くは自分たちが「ユダヤ人をやめた」と考えていたので、その子供たちや孫たちをユダヤ人として育てなかったからです。「イエスを信じるユダヤ人」の運動は、初代の死とともに消えてしまいました。

「個人の救い」という観点から見れば、ユダヤ人がイエスを信じて「ユダヤ人をやめた」としても問題はないかもしれませんが、神が忠実にアブラハム契約を守られたことの「証人」としての意味は失われてしまいます。この反省に立ったのが、現代のメシアニック運動なのです。

■LCJEのミッション

私たちは、イスラエル回復を祈るアジア各国のクリスチャンと交流があります。私たちが日本でイスラエル回復のために祈り始めて約90年だと言うと、皆さん、とても感動して下さるのですが、問題は高齢化です。新しくこの運動に参入してくる国々は、本当に元気いっぱいの若者たちが熱心に祈り、賛美しているのですが、運動が成熟した国々では運動の参加者が高齢化し、若者たちはイスラエルという「老人の運動」と考えます。イスラエルを熱心に支援する米国でも、その傾向が顕著なのです。

LCJE日本支部もまた、高齢化に直面しています。LCJE国際本部のトゥピヤ・ザレツキー氏から、タイのパタヤで40年前にLCJEが始まった時の話を聞いたことがあります。青年時代の思い出を語る彼の話には、熱気がありました。日本のLCJEも今、若い力が必要です。イスラエル回復というビジョンが、すぐにでも成就して主イエスが再臨されるのだから、世代交代、後継者育成は不要だという話も耳にしますが、それは約90年前に中田重治師も言ってしまった間違いなのです。

■アブラハムの訓練

父祖三代の継承はドラマチックです。神はアブラハムに子供を与えないので、アブラハムは代替策を用意しました。15:2で彼は「ダマスコのエリエゼル」の名前を口にしています。ソドムに暮らす親戚の口ではなく、行動を共にした使用人が後をつぐべきだと考えたのです。一方サラは、女奴隷に子供を産ませるという代替策を用意しました。でも、この2人の解決策はどちらも神のご計画とは違っていました。そして神はイサクを与えるのですが、ご存じのように、神はイサクを燔祭にささげるよう命じてアブラハムを試みたのです。神は後継者に関してアブラハムを徹底訓練されました。

そして、アブラハムには8人の子がいたのに、なぜかイサクだけがアブラハム契約の継承者となります。さらに、イサクにも2人の子供がいたのに、なぜかヤコブだけが継承者となりました。ところが、ヤコブの場合は、十二人の子供全員がアブラハム契約の継承者となりました。これは人間的には理解不能です。信仰継承は、計り知れない神のご計画によるのです。

長く子供が無かったアブラハム夫妻に神が超自然的に後継者をお与えになったように、LCJE日本支部にも主の導きで若い後継者が与えられるようにと祈っています。



ロシア・サハリン宣教への挑戦2

キリスト聖協団札幌教会・オリーブチャペル牧師 石田 吉男

■終末の日時計・イスラエル

イスラエルは、神の愛を告げる日時計です。そういう意味で、クリスチャンにとってイスラエルの動向は、最も注意すべき神の時のしるしであります。**「ルカ 21 章 24 節」**

この予言については、「過去に国を失ったイスラエルが1900年の時を経て1948年にイスラエル共和国として独立し、その後首都エルサレムを奪還したことで異邦人の時代は終わった」と多くの聖書学者が考えています。

現代イスラエル国家が成立して70年が経過しましたが、依然として周囲のアラブ諸国とは敵対関係にあります。内外で過激派によるテロ攻撃が続く一方、核を保有するイランの脅威、シリア内線に乗じて介入してきたロシア軍の動き（最近ではイスラエル全土を攻撃できるミサイル配備）など、この麗わしの国を手中に収めようとする力が働いています。

「ルカ 21 章 20 節・マルコ 13 章 33 節」

イエス様のお言葉に従い、イスラエル情勢から目を離さないようにしましょう。

では、イスラエルの国が求める王・メシアとはどんな人物でしょうか。彼らが求めるメシアは、十字架で死んだイエス・キリストではなく、宗教と政治を一つにし、あらゆる諸国の圧力からイスラエルを解放する力を持った人物と思われる。

この2018年にバチカンにおいて行われた会合の席で初めて、中国政府により公認されたカトリック教会の司教任命への署名、続いてロシア政府が承認したロシア正教会の司教の承認が行われました。時同じくして、北朝鮮との平和交渉の橋渡し役を務める韓国のムン・ジェイン大統領が、北朝鮮のキム・ジョンウン委員長に、「バチカンのローマ法王とお会いしませんか？北朝鮮を訪問するような私から頼んでみませんか？」と尋ねてみたところ、キム・ジョンウンは「是非そうしてください。お会いした時は強烈に歓迎いたします」と、満面の笑みを浮かべて返答しました。

仮にもし、ローマ法王の訪朝が実現すれば、様々な問題が解決されると思います。一概には喜べません。

中国、ロシア、そして北朝鮮で、多くのクリスチャンが信仰の自由を奪われ、迫害されているという実態があります。投獄された人々、地下教会で隠れて信仰を守っている人々がいます。その現実を棚に上げて、宗教と政治が一体となることによってもたらされる平和、それは一見美しい物の様に見えますが、あくまで人間的な妥協の流れの始まりの様に思えるのです。

過去の歴史において世界的な危機が訪れるたびに、平和条約が結ばれてきました。1987年にロシアのゴロバチョフ書記長と米国のレーガン大統領が核廃絶条約を結んで冷戦が終結したとき、ようやく世界に平和な時代が来たように見えました。しかし近年ではこの条約を破棄する動きが

進んでいます。平和を求める言葉を口にする陰で、米露両国合わせて1万1000発の核が保有されているなど、現実には様々な武器が製造・売買されています。

この世界は、光と闇との区別がつかない混沌とした時代に突入しています。まさにイザヤが**「イザヤ 60 章 2 節」**とさげんだとおりです。

やがてイスラエルでも、宗教と政治を一つにして平和を実現できる人物が現れたら、それをメシアとして受け入れ、契約を結ぶことになるのでしょうか。マタイはダニエル書を引用して、**「マタイ 24 章 15 節・マルコ 13 章 14 節・ダニエル 9 章 24 節」**と、私たちに注意をうながしています。

イスラエル人の真のメシアであり、王であられる方は、イエス・キリストただ一人です。**「ヨハネ 20 章 27 節」**

メシアと名乗りながら、この十字架上で受けた傷跡がないならば、それは偽キリストであり、「荒らす憎むべき者」、反キリストです。イスラエルはこの反キリストによってだまされ、彼と契約を結びますが、その契約は破棄されて裏切られ、再び迫害を受ける時代がやって来ると記されています。

「ゼカリヤ 12 章 10 節」

ユダヤ人の民族的な悔い改めの時こそ、イスラエルに大リバイバルが起こり、キリストの再臨が成就し、「イスラエルを通して全世界を祝福する」と宣言した神の言葉が実現し、真の平和が実現する時です。ですから今は、神の時を告げるイスラエルのことを改めて認識し、ユダヤ人の回復と救いを祈るべき時なのです。

■神の時に認識によって、時が縮まっていることを知る

「兄弟たちよ。私は次のことを言いたいのです。時は縮まっています。1コリ 7 章 29 節」

このみ言葉は、リビングバイブルでは「残された時間が極めて短く、主の仕事をやる機会も極めて少ないのです」と表現されています。

パウロは、「神の時を認識すると同時に、その時が縮まっていることも覚えておきなさい」と訴えています。福音伝道ができる時代は縮まっています。それはすなわち、福音を聞く相手の時、そして福音を宣べ伝える事を最優先課題として取り組み、聖霊の助けを頂いて、私たちの周囲から福音宣教を実践させていただきましょう。

エンドタイム・ビジョン・ミニストリーズでは、皆様のお祈りとご支援が近い将来必ず極東の地で起こるリバイバルに向けて用いられると信じ、ロシア・サハリン宣教への挑戦を継続させていただいております。

「イザヤ 59 章 19 節」

この5年間の働きで、サハリンの諸教会と日本の教会との距離が近くなってまいりました。兄弟姉妹同士の交わりが益々拡大し、日本を含めた極東のリバイバルを求めて互いに祈り合うその働きが益々活発化することを願っております。皆様の上に神の祝福が豊かにありますように！ シャローム



神学論争に際し留意すべきポイント

アルコ・イリス・ミニストリーズ代表 早川 衛

LCJE ニュースには、2019 年 5 月号から 7 月号まで、シモン・アミット氏の「ティックーンの教理は何を教えているか」という文章が掲載された。これは、6 月号の 8 頁に記されたとおり、LCJE 日本支部運営委員会メンバー内の十分な話し合いや、十分な事実関係の確認のないまま、ある個人から提供された情報をコーディネーターの独断で掲載したことに端を発するものである。

また、同文章は、5 月号の説明文にあるような「調査委員会が出した第一段階の調査報告」ではなく、あくまでもシモン・アミット氏個人が作成したものである。そのため、この度の掲載は、大きなフライングであり、大きな誤解や混乱を読者の皆さまに与えたものである。筆者も、このことを反省し、衷心よりお詫びを申し上げる次第である。

なお、7月号から、上述文書への応答であるティックーンによる公式コメントの邦語訳が、ティックーン・ジャパンパートナーシップ代表世話人であるスティーブン・ケイラー氏と行澤一人氏により紹介されている。LCJE 日本支部の謝罪に応え、このように協力してくださる両氏に対し、心からの謝意を表したい。

さて、今回のテーマについては、本年 5 月 30 日、イスラエル国において、本件調査委員会とティックーン側関係者が集まり、話し合いが持たれた。それは、まだ始められたばかりであり、今後、複数回の話し合いが持たれ、何らかの結論に至ることが期待されるものである。このような状況に鑑み、筆者は、神学論争に際し留意すべきと思われるポイントを記すこととする。

数年前、日本福音主義神学会で、ある参加者が「どのような神学も歴史の真空状態の中で生み出されてくるものではなく、神学者が生きている具体的な歴史的状況に必然的に影響を受けるものだ。」と発言した。確かに、使徒の働き 15 章に記されている、いわゆるエルサレム会議の決議も、異邦人の救いという歴史的状況に影響されたもの、と言い得る。そうだとすれば、ティックーンの教理の誕生に影響を与えた歴史的状況とは何なのか。ティックーンの意味は、回復である。その教理が主張する回復は、使徒や預言者の回復。また、使徒の働き 3 章 19 から 21 節に書かれた回復である。今は終わりの時代であるという認識が世界レベルで存在する。多くの被造物が修復不可能な状態にあるという認識も同

様に存在する。そのような認識や状況が、回復を待ち望むという霊的空気を造り出している。また、神は、世界各地で部分的回復を見せておられる。一例を挙げるなら、中米グアテマラのアルモロンガ村である。筆者は、同地を訪問した経験を持つが、90%を優に超える住民がキリスト者となっただけでなく、土地が回復され、農作物が通常の数倍の大きさに成長している。ティックーンの教理が生れた背景には、このような世界的状況があると言えるのではないかと。そして、終わりの時代の回復については、それが聖書に記されているゆえ、否定されるべきものではなく、必然である、と言い得る。

神学論争の際、往々にして犯される誤りのひとつは、論争のテーマが、教義、教理、意見に関するものかを整理しないことである。ちなみに今回の論争のテーマは、教義ではなく教理に関するものである。過去、キリスト教会の歴史の中で多くのグループが、教義を否定しなかったにも拘わらず、異端のレッテルを貼られたという悲しい事実がある。このようなことを避けなければならないのである。

論争の際、そのテーマが何に関わるものなのか、という視点を忘れてはならない。フランク・ヴィオラ氏は、C.S.ルイスが、(1) 煉獄の存在を信じていた、(2) 死者への祈りの有効性を信じていた、(3) 地獄に落ちた者が死後に恵みへと移行することは可能であると信じていた、(4) 全てのクリスチャンが禁酒すべきだという考えは間違っていると信じていた、(5) カトリックのミサは聖餐の妥当な理解であると信じていた、(6) ヨブ記は史実ではなく、聖書は誤りを含むと信じていた、と記した。

このことに関し、山崎ランサム氏（聖契神学校教務主任）は、次のように述べている。

- (1) 多くの福音主義者は、いわゆる教理的誤りについて、キリストにある兄弟姉妹をすぐに軽視したり、罵倒さえしたりする。それらの兄弟姉妹たちが歴史的正当信条（使徒信条、ニカイア信条など）を堅持していたとしても、である。そのような軽視や罵倒は神の国に属する者たちの誰にも益することがない。
- (2) ルイスのショッキングな見解のどれ一つとして、使徒信条の内容と矛盾するものはないと言える。
- (3) あらゆる点で完全無欠な教理の体系を持つことは誰にもできない。……………次ページへ続く▶

聖書が、論争のテーマをどう論じているのかを見極めるため、山崎ランサム氏は「平和の神の勝利」（プレイズ出版）の7頁において、ある主題についての聖書の根拠を求めようとする時、同主題に関し、(1) 聖書が明確に肯定している、(2) 聖書が肯定している可能性はあるが、明確ではない、(3) 聖書が肯定も否定もしていない、(4) 聖書が否定している可能性はあるが、明確ではない、(5) 聖書が明確に否定している、の категорияに分ける事を教えている。

今回の論争のテーマ（使徒や預言者の回復など）は、上記のどれに当てはまるのだろうか。

筆者は、使徒や預言者について記された第一コリント人への手紙やエペソ人への手紙を、文脈やギリシャ語文法に沿い、あるいは、聖書全体を見直すという視点を持って再読すべきであると思料する。このことに関しては、誌面の制約上、次号以降に記すこととしたい。

最後に、神学論争に際し最も注意すべき点のひとつとして、第一コリント人への手紙1章9から12節などに基づき「論争する者たちが、主イエス・キリストとの交わりを持つこと」と記したい。同12節を見る時、パウロ派、アポロ派、ケファ派、キリスト派等があったことに気づく。

つまり、教理や意見の違いが存在したのである。ここで「私はキリストにつく」と言うグループがあったことに注目してほしい。キリストにつくことは悪なのか。このグループは、自分たちだけがキリストにつく正統派である、と主張していたのではないかと上述の山崎ランサム氏は、指摘する。

キリスト者が、教理や意見の違いによって論争する時に大切な事は、9節にある「主との交わり」である。使徒の働き15章28節が示すように、最初の神学論争時には、聖霊との交わりがあった。この視点が欠落してはならない。

LCJE

LCJE日本支部事務局レター

LCJEは、ユダヤ人伝道団体の情報交換ネットワークです。加盟しているユダヤ人伝道団体それぞれの立場・活動を尊重して、機関紙などに情報を掲載しています。しかし特定の立場・教理などを、LCJEとして支持するものではありません。読者におかれましては、個々の見識によって提供される情報を判断してくださいませよう、お願いいたします。

2019年度祈禱会予定

場 所	9月	10月	11月	会 場
大阪 (6:30より)	12日	10日	7日	北浜スクエア (VIP関西センター8F)
東京 (1:30より)	14日	12日	9日	御茶ノ水クリスチャンセンター 8F 811号室

【大阪祈りにご参加される方へ】第二木曜日午後6時半開始です。

【東京祈りにご参加される方へ】ご注意ください▶通常祈りの会場の、811号室ですが、変更される場合があります。

階下の掲示板をご覧ください。ご参加ください。

LCJE日本支部2019年6月度会計

収入・献金		支出・現金	
科 目	金 額	科 目	金 額
献 金	145,600	事 務 費	12,800
大阪祈り会席上献金	10,000	NEWSレター製作費	50,120
		郵 送 費	41,780
		郵便振替手数料	4,600
		通 信 費	5,500
		賃 借 ・ 管 理 費	21,600
		高 熱 費 ・ 共 益 費	9,900
		交 通 旅 費	7,000
		祈 り 会 経 費	14,000
		国 際 大 会 出 席 費	59,357
合 計	15,600	合 計	225,877
		差 引 残 高	-70,277
前月よりの繰越	241,067	翌月への繰越	170,790

事務局よりのお知らせ

LCJE日本支部では、皆様からの御投稿をお待ちしています。インターネットでの御投稿、原稿用紙での御投稿いずれも大歓迎いたします。文字数は2000文字前後でお願いいたします。投稿記事は、封書で送っていただくか、LCJEJAPAN@HOTMAIL.COM 又は **FAX 072-867-6721** まで。宜しくお願い致します。

編集後記

コ・ワーカーの皆様お元気にお過ごしでしょうか。とても暑い毎日が続きますがお体ご自愛ください。イスラエルの政情はとても懸念されますが、それにもまして米国のトランプ大統領の霊性が守られますようお祈りください。今月のLCJEニュースもイスラエルを愛する方々の興味深いニュースお手元へ届けられる幸いに感謝しています。今月も、まだ主とお会いしていないユダヤ人には一日も早く主とお会いし救い主を受け入れ、救われます様にお祈りください。是非大阪祈り会、東京祈り会へもご出席くださり、イスラエルの平和を執り成しお祈りいたしましょう。コ・ワーカーお一人お一人に主の祝福がありますように。シャローム

LCJE日本支部事務局 高瀬真理

LCJE日本支部は、皆様の尊い献金で支えられています。感謝